

関係性
の
未来

私心を捨て、
衆知を集める。
—— 松下政経塾の30年 ——



財団法人松下政経塾が、2009年、設立から30周年を迎える。“経営の神様”と言われ、まさしく立志伝中の人物である松下幸之助氏を創始者に仰ぐ同塾は、その歴史の中で多くの政治家、実業家を輩出してきた。30年の時を経て、「塾員」と呼ばれる卒業生たちはそれぞれの分野で日本の中核を担う位置に付き、その意味でいま、機は熟したようにみえる。

松下政経塾とは何か。その理念とは何か。理念と志が日本をどう変えるのか——。

風薫る6月の湘南の地に、古山和宏塾頭を訪ねた。

自修自得の精神

松下政経塾はしばしば、私塾であると言われる。法的には確かに財団法人格を持つ存在だが、私財を投じて塾を設立した、故松下幸之助氏を抜きにして政経塾を語ることはできない。全寮制を敷いていることの背景には、氏がかつて10歳にも満たない年齢で大阪・船場で丁稚奉公に出され、多様な人々に揉まれながら人間を培ってきたことが、遠因として響いている。単に知識を授ける、技術を修得するだけなら通学でかまわないが、将来、為政者や実業界のリーダーとして世のためになろうという人材を育成するためには、ある一定期間の生活のすべてを投じる覚悟が必要なのである。

神奈川県茅ヶ崎市にある同塾で、文字どおり塾生たちと寝食を共にする古山和宏塾頭は語る。

「松下政経塾にはいくつかの明確な研修方針がありますが、特に重要なものとして『自修自得』があります。進むべき道は自らが悟り、開拓していくという精神です。ですから塾では、常勤の講師を置かない方針を貫いていますし、なによりも塾生が各自のテーマを見つけて自主的な活動計画を実行していくことを大事にしています」

塾生の日りは早い。6時前に起床し、すぐに中庭集合。ラジオ体操をしてから1時間近く塾内清掃にかかる。終了したら、構内からほど近い茅ヶ崎の海岸線（2.5～3km）をジョギング。このあとでようやく朝食となる。8時45分から朝会。そこから午前・午後の正規の研修があり、夕方以降はフリーだが、翌日の予習やレポートの作成など、遊ぶ余裕はほとんどなさそうだ。また時にはラウンジ・ルームで、酒を片手に夜遅くまで議論を戦わせることもあるという。

取材時に案内していただいた松下政経塾の施設は、敷地総面積が約2万平米。その中に、研修棟、寮棟、講堂、芝生の広がる多目的広場、さらには体育館や茶室まである堂々たる内容である。豊かな樹木に覆われ、柑橘類が収穫でき、松林を抜けてやってくる海風がなんと心地よい。「情報の集積地・東京からほど近く、しかし同時に都心の喧騒からも離れた場所」という松下氏の意向で白羽の矢が立ったという土地だけに、確かにここの清らかな空気と光は申し分ない環境である。



古山和宏氏

ふるやまかずひろ

1959年、東京・板橋区生まれ。都立小石川高校を経て、1982年慶応義塾大学法学部（国際政治専攻）卒業。1982年、財団法人松下政経塾 第三期生として入塾。オーストラリア国立タスマニア大学にて講師を務め、現在、松下政経塾研修塾頭。



財団法人松下政経塾

松下電器産業の創業者・松下幸之助氏が、私財70億円を投じて設立した塾。「日本はますます混迷の度を深めていく」という予見に基づき、難局を打開する指導者の育成を目的としている。1979年に創立され、来年で30周年を迎える。塾生は毎年募集されるが、30名以上は入塾したことがないという少数精鋭で、全寮制。研修期間は3年間。研修期間中は、月額20万円程度の研修費が支給される。政界、財界、メディア、教育などの各分野で多くの塾員（卒業生）たちが活躍の場を広げている。

WEB <http://www.mskj.or.jp/>



ゆったりとしたラウンジ・ルーム。ここで夜遅くまで議論することもあるという。

「素直」の人、松下幸之助

松下幸之助という人物は、おそらく近代以降の日本の経営者の中では、最も著名な人であろう。松下電器産業の経営はもちろん、出版社のPHP研究所や、シンクタンクも設立するなど、その活動の幅は企業人のそれをはるかに超えていた。そして松下政経塾。塾の設立当時、年齢がすでに85歳に達していたという事実で改めて驚かされる。

「失敗すればそれこそ晩節を汚すことにも成りかねません。一つのエピソードとしてご紹介しますが、実は政経塾の構想は、実際の設立である1979年より10年ほど前に、松下さんの腹の中にはあったというのです。ところが当時は、『経済人が政治に手を出しうまく行ったためがないではないか』といった反対意見が多かったんですね。そしてここからが松下さんの大きな特長なのですが、『そうか、反対する人がこれだけいるならばやめよう』と考えるんです。しかし10年経って、それでも21世紀の日本をなんとかしなければ、という思い止みが

たく、また相談を持ちかけたところ、『君、10年前はすまなかった。確かに君のいうとおりだった。これから何でも協力させてもらおうよ』という声が大勢を占めたんですね」

松下幸之助氏の著作をひもどくと、随所に「素直」の二文字が現れるが、まさに「素直」の面目躍如たる逸話ではないか。世の経営者とはスタンスがまるで違う。

「松下さんという方は、とにかく人の話をよく聞く方でした。衆知を集める、といいますか、民衆の、つまり一般の人々の声こそ神のごとき存在だという謙虚な態度です。しかし同時に、間違っただと、違うと感じたことに対してはビシリと厳しく指摘する方でもありました。いま、松下さんの昔の講話など、相当数の貴重な声を整理しているところなのですが、私をはじめ若い塾生たちの意見に静かに耳を傾け、『ああ、そうか』『君、そら、ええな』とやさしく相槌を打っている様子が記録されています。いま聞くと、若造が経営の神様に対してよくもあんなことが言えた

ものだと顔から火の出る思いですが（笑）、聞いてくれるのでますます調子に乗って話してしまう、そんな魅力を持った方でした」

強烈だった最初の出会い

松下政経塾出身者と聞いて、例えばどんな顔が思い浮かぶだろうか。一期生であり、塾出身の最初の国会議員、最初の政務次官である逢沢一郎氏。民主党の代表を務めた前原誠司氏。東京の杉並区、横浜市でそれぞれ手腕を発揮する山田宏氏、中田宏氏。そして古山和宏塾頭自身も、3期生である。同期に、現神奈川県知事の松沢成文氏がいる。

「私が松下政経塾に入ったのは半ば偶然でした。大学時代、たまたま就職課の前を通ったら、『塾生募集』のポスターが貼ってあったんです。もちろん松下政経塾の存在は話題になってはいましたが、当時、そこを出て将来どうなるというロールモデルのようなものはまったくありませんでした。しかし、私はそのポスターの近くに置か

2万平米という広大な敷地の一角には、茶室もある。塾では、日本の伝統精神を理解することが重視され、茶道や書道は重要かつ必須の研修科目だ。松下幸之助氏は、塾を訪れると、この茶室に宿泊することを常としていた。



パナソニック株式会社に変更し、2009年度内をメドに「ナショナル」ブランドが消滅することが決定している。むろん、松下政経塾の名前に変更はないが、最後にこの点についてうかがってみた。

「不易流行という言葉があります。政経塾がまがりなりにも30年間存続できたのは、不易なる理想、理念を堅持してきたからだと思います。しかし同時に流行の部分は柔軟でいい。それこそ政経塾のプログラムなんてものは、毎年、ゼロベースから見直しています。いちばん大事なことは、基本理念をしっかり継承し、その時々の中にもどう反映させていくかだと思います」

Text by : 北村一樹



した若者たちは、いまや日本という国の舵取りをするリーダーシップを随所で発揮しつつある。松下幸之助氏、そして松下政経塾の理念は、どのような形で卒業生たちに継承され、現実の社会に反映されていくのだろうか。その具体的な好例を、取材当日、講堂入口に見つけたように思う。松下氏の持論である「無税国家にしよう」という内容が書かれた「松下幸之助塾主講和録」のポスターである。これは、「無税自治体構想」を掲げ、話題になった東京・杉並区長の山田宏氏の主張にそのまま受け継がれていると考えられる。

「山田宏さんは政経塾の2期生で、私の一つ先輩に当たる方です。山田さんが掲げておられる構想を、『何を夢のような』と揶揄する人も少なくありませんが、何十年後にそれは可能であると、本気でお考えなんです。私はこのように、まず理念をしっかりと掲げ、自分の名誉や利益よりも世のため、人のため、そして国家のために尽くす人物になることこそが、松下さんの教えの根本だと思います。いま、清濁併せ呑むといいますが、腹芸ができれば政治はやれない、といわんばかりの悪しき現実主義が、国民の政治不信を加速させています。今こそ、松下政経塾の理念の原点に戻る時だと思っています」

設立から30年、そろそろ、ある意味で「結果」が求められていることに、古山塾頭はじゅうぶん、意識的だ。

「政治家や実業家を多数輩出したからといって、それだけではダメなんです。『松下政経塾出身者の働きによって、果たして日本は良くなったのか?』が問われるはず。あと何十年後かの人々が、『あの時代には、松下政経塾の出身の人たちが何人も出てきて日本を変えた』、そう評価されるよう、努力していきたいと思っています」

松下電器産業は今年10月1日を以て社名を

れていたパンフレット（説明には写真ではなく挿し絵が入っている）を手に取り、最初のページに松下幸之助さんが滔滔と書かれている、日本の将来を担う人材を育てるんだという熱い思いに、深く呼応してしまったんですね」

松下氏との思い出で最も強烈なのは、最初の出会い、3次試験の最終面接だという。

「松下さんをはじめ、どこかでお顔を見たことがあるような方々がズラリ揃って面接を受けるのですが、30分間の面接のうち、最初の25分間は松下さんは一言もおっしゃらないんです。背筋をピンと伸ばして、瞬きもしていないのではないかというくらいにじっとこちらを見ている。そして最後にこう、おっしゃったんです。『君、この研修は5年間(注：当時は5年間。現在は3年間)や。先生はおへんで。それでも耐えられるか』。『がんばります』、そう答えるのがやっとでした。なにが瞬間にして契約を交わしたような、『君、あの時にできると言ったやないか』と約束させられてたような、ズシリと重みのある瞬間でした」

「先生はいない。つまり「自修自得」である。松下幸之助氏はしばしば「最も大切なことは教えられる」と語ったという。ならば盗むしかない。そもそも「経営のコツ」などというものが教えられるはずはないのだから、塾とはまさしく、自らのやり方で貪欲に「盗む」場であるのだろう。

理念の継承、そして日本のゆくえ

2009年で設立30年の節目を迎える松下政経塾。卒業生の進路は2008年3月現在、政治分野が100名、経済が67名、教育・研究・マスコミが36名、その他27名で合計230名。およそ30年間でこの数というのは、まさしく少数精鋭と言えるだろう。初期の頃に入塾